

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第34集

吉岡原遺跡

平成3年度県道掛川山梨線道路改築に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1992

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告書 第34集

吉岡原遺跡

平成3年度県道掛川山梨線道路改築に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1992

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

序

吉岡原遺跡は、掛川市の西部に位置する和田岡原に営まれた弥生時代後期から古墳時代前期にかけての集落遺跡である。すでに当遺跡は、掛川市教育委員会によって2度にわたって発掘調査が行われており、弥生時代後期から古墳時代前期の集落跡が確認されている。今回、県道掛川山梨線の改築工事に伴う埋蔵文化財の調査としてその一部を当研究所で発掘調査を行った。その結果、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての竪穴住居跡が検出され、また遺跡の西限を確認することができた。

和田岡原には、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての遺跡が多数確認されているが、それらの大半は弥生時代後期に成立し、古墳時代の前期まで継続していることが知られている。

原野谷川流域の弥生時代の集落は、丘陵上に多く、低地部に少ない分布を示しており、丘陵上の遺跡は掛川市教育委員会によって活発に調査が行われてきており、その成果が累積されているのに対して、低地部の遺跡は未調査の部分が多く、そのあり方は多く不明確であった。しかし近年、国道1号線袋井バイパス着工に伴って当研究所によって領家遺跡・板尻遺跡をはじめ梅橋北遺跡・原川遺跡など、低地部に分布する遺跡の調査が実施され、その性格も徐々に明らかになりつつある。これら低地部の遺跡の調査で注目されるのは、弥生時代の中期段階にすでに広範囲に集落が広がっており、一部には掘立柱建物群も存在していることである。今後、吉岡原遺跡を含めた丘陵上に分布する遺跡の内容が明らかにされることによって後期の遺跡群と低地に確認された中期の遺跡群の関係が解明されてくるであろう。

今回の調査によって、和田岡原に占地する弥生時代後期の集落の一端を知り得ることができ、これらの遺跡群の関係を究明するための一資料を得ることができた。

調査の実施ならびに報告書の作成にあたっては、静岡県袋井土木事務所・静岡県教育委員会・掛川市教育委員会の各位に、多大の援助・協力を得ている。ここに、関係各位に深謝の意を表す。

1992年3月

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

所長 齋藤 忠

例 言

1. 本書は、掛川市吉岡字大塚腰1521番地他に所在する吉岡原遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、平成3年度県道掛川山梨線拡幅事業に係る埋蔵文化財発掘調査業務として袋井土木事務所からの委託を受け、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所で行った。
3. 調査の実施にあたり、地元との折衝・調整に関する多くの援助を掛川市教育委員会社会教育課より得ることができた。
4. 発掘調査は、静岡県埋蔵文化財調査研究所所長齋藤忠の指導の下に調査研究1課篠原修二・鈴木正悟が担当して実施した。
5. 本書は調査研究部次長兼調査研究第1課長平野吾郎の助言を得て篠原修二・鈴木正悟が編集・執筆を行なった。
6. 本書の作成に当り、隣接地域の発掘調査について掛川市教育委員会、松本一男、戸塚和美、松井一明、出土陶磁器について本研究所の足立順司の諸氏に種々御教示をいただいた。
7. 現地発掘作業では次の方々の御協力を得た。
大庭さだ 岡山よね子 小沢ろく 鈴木はつ子 豊田八重子
萩田ふみ 宮崎充子 村松さと 山崎すぎ 山崎まち (五十音順・敬称略)
8. 現地発掘調査に関する図面および出土遺物は当面静岡県埋蔵文化財調査研究所で保管しているが、その管理は最終的には静岡県教育委員会に移管することになっている。

目 次

序	
例言	
第I章 調査に至る経過	1
第II章 位置と環境	1
第III章 調査の概要	5
第1節 調査の方法	
第2節 調査の経過	
第IV章 遺 構	9
第V章 遺 物	13
第VI章 まとめ	15
参考文献	

挿図・挿表目次

第1図 縄文・弥生時代の遺跡分布図	2
第2図 遺跡周辺の遺跡分布および地形図	3
第3図 吉岡原遺跡グリッド配置図	5
第4図 吉岡原遺跡遺構全体図	8
第5図 SB01平面実測図	9
第6図 SD03・05断面図	10
第7図 SX08平面実測図	12
第8図 出土石器実測図	14
第9図 出土石器実測図	14
第1表 周辺遺跡地名表	2

図版目次

図版1 遺跡周辺環境（空中写真）	
図版2 遺構全景	
図版3 遺構検出状況	
1. 1区遺構全景（東から）	
2. 2区遺構全景（東から）	
図版4 SB01	
1. 床面検出状況（東から）	
2. 完掘状況（東から）	
図版5	
1. SD03土層断面	
2. SD03・05検出状況（1区）	
3. SX08完掘状況	
図版6 出土遺物1	
図版7 出土遺物2	

第I章 調査に至る経過

県道掛川山梨線（以下県道）は掛川市大池から袋井市山梨に至る全長約10kmの道路である。掛川・袋井の両市内から森町方面への近道として地元をはじめ多くの人々に利用されている。しかし、近年の交通量の増加と周辺地域の著しい開発にともなう大型自動車の往来によって従来の道幅では通行に困難な状況になり、昭和59年度から拡幅工事が開始された。現在、路線内では掛川・袋井両市内で工事が行われてきており部分的に道幅は広がっている。今回の調査対象地は袋井市と掛川市の市境近くにあたり、掛川市内で残された最後の未工事区間の東端区域である。

遺跡は古岡原と通称される段丘上にあり、周辺はお茶畑掛川の一翼を担う大茶畑地帯で、緑色の景観が広がっている。昭和56年度に掛川市教育委員会（以下市教委）が作成した『掛川市遺跡地図』によると遺跡の大部分は県道以南の茶畑内に占地しているが、遺跡範囲の一部が県道にも及んでおり前述の拡幅工事に合わせ、先年には市教委が実施した調査区の延長上である。今回発掘調査を実施するに至った。

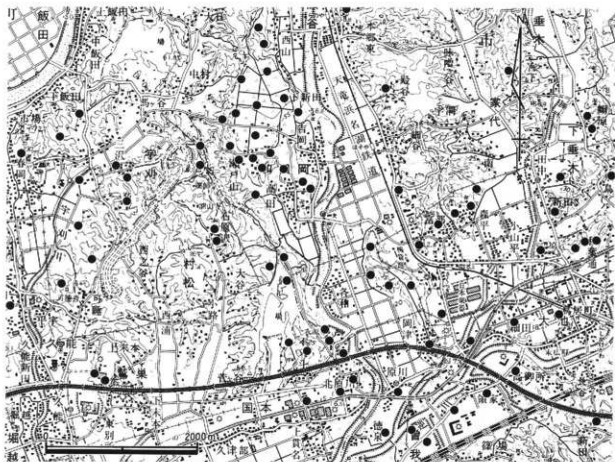
周辺に分布する高田・女高・瀬戸山などの各遺跡も近年その一部分を茶園改植の計画に合わせ、そのつど発掘調査を行ってきたが、いずれも小範囲の調査のため、遺跡の全体を把握するに至っていない。古岡原遺跡の調査は、今回の調査に先立って昭和161年度と平成2年度の2回にわたって市教委によって調査が行われ、竪穴住居跡などの集落の一部分が確認されている。とくに平成2年度の調査では、今回発掘調査地点に隣接した東側約30mの範囲にわたって行なわれ、弥生時代後期の竪穴住居跡3軒・小穴多数、古墳時代中期以降の古墳の古溝1などが確認されている。

第II章 位置と環境

遺跡の存する和田岡地区は、掛川市街地から北西に約10km行ったところにある。この地域は掛川市の北部八高山麓を水源とする原野谷川が流れており、流域には浸食と隆起作用によって形成された多くの河岸段丘がみられる。和田岡地区も原野谷川右岸の河岸段丘の1つに立地しており、その地形は全体的には東に緩やかに傾斜している。対岸には本郷地区の河岸段丘が形成されている。当地域における河岸段丘は大きく2段（上段：標高55～60m前後、下段：標高30～50m前後）に分かれ、さらに下段を細かく2段（上段：標高50m台、下段：標高40m台）に分けることができる。大きく分けた上段を通称古岡原、下段を高田原と呼ぶ。両段丘面の西方には宇刈川に開折された谷があり、段丘西側の地形は西に向って下がっている。また、この谷から突起上にのびた幾本かの小谷が台地の縁辺部に変化をつけている。

和田岡原一帯は原野谷川流域で最も遺跡が多く分布している地域で、古岡原には城ノ腰・東原・中原・高田上ノ段・溝ノ口・今坂・古岡原・瀬戸山Ⅰ・Ⅱの各遺跡が、高田原には瀬戸山Ⅲ・花ノ腰・高田・女高・吉岡下ノ段・平田ヶ谷の各遺跡が確認されている（第1表・第1回参照）。また、段丘の縁辺には春林院・吉岡大塚・瓢塚・行人塚・各和金塚古墳など5世紀を中心とする多くの古墳が存在している。

次にこの地域の縄文時代から古墳時代にかけての遺跡について昭和59年度の『掛川市遺跡分布調査報告1』を中心に各時代ごとに概観することにする。



第1図 縄文・弥生時代の遺跡分布図 (1/5000)

遺跡名	時代	縄文			弥生			古墳			備考
		前	中	後	前	中	後	前	中	後	
1 城ノ腰遺跡											
2 東原遺跡											
3 中原遺跡											概観(昭和67) 報告書(昭和59)
4 高田上ノ段遺跡											報告書(昭和61)
5 溝ノ口遺跡											
6 今坂遺跡											高田上ノ段遺跡報告書(昭和61)に掲載
7 吉岡原遺跡											概観(昭和62)
8 瀬戸山I遺跡											概観1a(昭和62) 報告書1b(昭和62)
9 瀬戸山II遺跡											
10 瀬戸山III遺跡											
11 花ノ腰遺跡											
12 高田遺跡											概観(昭和63) 跡六3号墳・高田遺跡報告書(平成2)
13 女高遺跡											概観(昭和60) 報告書(平成1) 女高遺跡・行人塚古墳報告書(平成2)
14 吉岡下ノ段遺跡											
15 平田ヶ谷遺跡											

注 ① ----部は分布調査もしくは発掘調査時に遺物のみの採集のもの。
 ② ---部は発掘調査が実施され、遺構が検出されたもの。
 ③ ==部は吉岡原に立地する遺跡。下部は高田原に立地する遺跡。

第1表 周辺遺跡地名表



第2図 遺跡周辺の遺跡分布および地形図 (1/10000)

縄文時代の掛川市域は人々の居住が開始された時期にあたり、遺跡の分布も原野谷川の流域とその支流で市内の東部から中心部に流れ込む逆川流域に集中的にみられる。ここでは、原野谷川流域に限定するが、早期には瀬戸山Ⅰ・Ⅱ遺跡などの数箇所です少量の土器片が採集されるだけで、遺構は未確認である。中期には瀬戸山Ⅰ・Ⅱ（打製石斧、乳棒状石斧）・吉岡下ノ段（石鏃、石匙、石錐をはじめ各種石製品）・中原・吉岡原遺跡（打製石斧）のように当期の土器などが採集される遺跡が増えることや殊に中原遺跡では昭和56年度に発掘調査が実施され、中期の土坑、埋壘、集石などの遺構と土器片、石器などの遺物が確認されている。中期中葉から後期前葉にかけては中原遺跡を拠点とした人々の活動がみられる。以後、一般的には中期後葉に遺跡数は急増し、後期には吉岡原遺跡で土器の採集がされるのみで遺跡数が激減してしまう。この時期の遺跡数の増減については直接的には人口の増減に対応する集落の分散・集中が考えられ、その原因として、気象変化にともなう動植物相の変化が早くから指摘されている。

弥生時代の原野谷川流域の遺跡分布は、段丘・丘陵部に多く、低地部に少ない。中流域の和田岡原では、女高遺跡が後期（～古墳時代前期）の竪穴住居跡13軒、掘立柱建物跡3棟などが検出され、高田上ノ段遺跡では、昭和60年度の調査で後期の竪穴住居跡1軒、土坑7基、溝状遺構6条などが検出されており、集落域西限の一部であることが確認されている。瀬戸山Ⅰ遺跡も昭和61・62年度の調査で後期（～古墳時代前期）の竪穴住居跡20軒、掘立柱建物跡5棟などが検出され、やはり集落遺跡であることが確認され、同時に調査地点が遺跡の中心部と西部部であることも確かめられている。さらに高田遺跡では、昭和62年度の調査で後期の竪穴住居跡1軒が確認されている。吉岡原遺跡については前述（調査に至る経過の項参照）のように後期（～古墳時代前期）の集落遺跡と確認されている（以上の調査はすべて掛川市教委による）。また、前述の『掛川市遺跡分布調査報告Ⅰ』によれば表採だけではあるが、瀬戸山Ⅱ・Ⅲ・東原・溝ノ口・吉岡下ノ段・平田ヶ谷・花ノ腰遺跡でも弥生土器が確認されており、遺跡の広がり指摘される。以上の遺跡のなかで縄文時代の晩期からひきつづき集落が経営されたのは瀬戸山Ⅱ遺跡のみである。以下女高遺跡は弥生時代の中期の成立が知られ、他はいずれも後期に成立し、古墳時代まで営みが確認される。

また、前述の遺跡の南方に位置する原野谷川と逆川の合流地点の遺跡については、梅橋北遺跡で弥生中期の溝1条（昭和59年度：掛川市教委）の検出をはじめ、領家遺跡では、遺構の検出は認められなかったが、遺跡範囲に含まれる地点からの中期の土器の出土（昭和62年度：静岡県埋蔵文化財調査研究所）が確認されている。原川遺跡では中期の掘立柱建物跡、土器棺墓などを含む集落域が確認されている。これらはいずれも低地部に立地する遺跡で、中期から集落の営みがなされていた可能性も推定されている。このように低地部に中期の集落が形成された可能性が高まってきており、今後これらの遺跡の調査が進展することによって、その多くが後期に成立する吉岡原・高田原の丘陵上の遺跡との関係も分かってくるのではないだろうか。

古墳時代には、前述の弥生後期に成立した集落が、ひきつづいて営まれており、その多くが古墳時代前期で断絶している。例外は高田遺跡と吉岡下ノ段遺跡で、前者は中期まで連続して経営がなされており、後者は後期まで連続している。また、高田上ノ段遺跡では、前期は欠如し、中期の営みが知られる。しかし、多くは未調査の段階なので、全容の解明には先行する時代同様にこれからの調査結果の蓄積が必要である。和田岡古墳群は大型の古墳が多く、各和金塚・吉岡大塚・瓢塚・行人塚などの前方後円墳を含んでいる。これらは古墳時代の中期に築造されたことが知られる。なお、前期の古墳については確認されておらず、後期については墳丘を持つ古墳が消滅し、代わって大横穴群（菅ヶ谷横穴群）がみられるようになる。

第三章 調査の概要

第1節 調査の方法

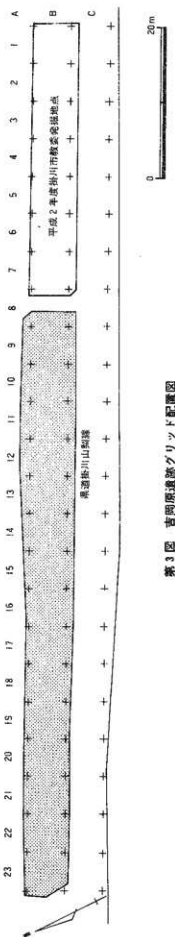
発掘調査は、調査用地にかかる農道を境として全体を2区画に分けて調査区を設定して行なった。便宜上、道路を挟んで西側を1区、東側を2区とした。発掘調査対象地の範囲は480㎡ほどあり、この全面に5m×5mのグリッドを設定した。グリッドの設定にあたり今回の調査対象地が平成2年度に市教委が発掘調査を実施した地域と連続する性格の道跡と考えられることから、今後の整理作業などを考慮して市教委が設定したグリッド（東から西に算用数字順に1～7、北から南にアルファベット順にA・Bと設定。よって各グリッドは東から西へA1・A2・A3…と表記されることになる）名をそのまま踏襲し、東側から順に8～23の番号をつけて、北から南へA～Cとした（なお、A～Cの表記であるが、今回の調査対象地の一部が市教委の調査地域より北へ広がったので、市教委のAをBに、BをCに変更した。そして、Bの北側のグリッドをAとした）。したがって、今回調査対象地は市教委の続き番号で東から西へA8・A9・A10…と表記されることとなる。なお、グリッド軸（南北）線はN-28°Eである。

調査の実施に先立ち、調査対象地に植わっていた茶木の伐採を行ない、ついで建設用重機による表土及び中間層の除去を実施した。発掘調査作業上の安全を考慮し、泉道に面する調査区南側に防護フェンスを設置した。

発掘調査の排土には、前述のように表土及び中間層の除去を建設用重機で行ない、坂田種苗用地へ運び出した。その後、遺構検出面までの掘削、遺構・遺物の検出については手掘りで行なうことにした。排土場所については表土及び中間層除去の際に、以後の排土量はそれほど多くはないと考えられたので、1区については農道の西側の調査対象地に、2区については農道の東側と市教委の調査済み区域に2分することにした。遺構は、当研究所での整理記号にしたがって堅穴住居跡はSB、溝はSD、小穴はSP、意味不明の遺構についてはSXとし、検出順に通し番号をつけて表記した。また、出土遺物のほとんどは土器片であり、台帳に登録後、現地にて洗浄・注記を行ない、以後は研究所にて実測図作成などの整理作業を行なうことにした。

遺構平面図の作成にあたっては現地に水糸を張った簡易測り方を使用し、縮尺はすべて1:20で作成した。土層断面図についても縮尺は1:20に統一した。これらの計測図面はすべてマイクロフィルムの撮影を行ない、アバチュアカード化して保管することになっている。

現地調査での写真撮影は、6×7版のカメラと35mmのカメラを使用し



第3区 吉岡原遺跡グリッド配置図

た。そして、遺構などの写真の記録には6×7版と35mmの白黒写真と35mmのカラースライドを用い、現地調査の作業工程記録用としては35mmのカラネガを併せて用いた。また、調査区全景の写真撮影には2～4段に組んだローリングタワーを利用した。

第2節 調査の経過

現地の発掘調査は、平成3年12月2日(月)に開始され同年12月19日(木)に終了するまでの約2週間にわたって実施された。以下日を追って経過を述べることにする。

12月2日(月)午前10時から調査に先立ち当研究所常務理事及び調査研究部長の参加を得て龍尾神社の宮司により、約30分にわたって安全祈願祭を行なった。

安全祈願祭終了後、2区の東側から中間層(黒褐色土)を除去しながら遺構の検出作業を行なった。先日の建設重機による表土及び中間層の除去の段階で大方の予想はついていたが、溝(SD02～05)が調査区の南北で検出され、調査区を東西に横断していることが確認された。また、竪穴住居跡(SB01)1軒が調査区の東側において存在することも確認されたが、前述の溝と重複していた。竪穴住居跡の時期については東隣の市教委の調査から弥生時代後期～古墳時代前期にかけてのものと同推測された。また、他の遺構については小穴が多数点在しているように見えた。

12月4日(水)までに2区の遺構確認面までの検出が済み、同区では竪穴住居跡の検出を後に回すこととして、溝の任意の箇所土層帯を残しながら、溝の掘削を行なうことになった。また、この日までと並行していた1区のグリッドの杭打ちを終了させた。

12月5日(木)1区の遺構検出作業ならびに遺構の発掘が終了し、明日1区の遺構全景写真を撮影することになった。1区の遺構は2区で検出された溝2条のつづきのみであったために各溝の断面を、調査区北側の溝(SD03)については4箇所、南側の溝(SD05)については2箇所の写真撮影をし、つづいて土層断面図の作成を行なった。



発掘作業



発掘作業

12月6日(金)午前中に1区の遺構全景写真の撮影を行ない、つづいて平面実測作業の準備のため水糸張りを開始した。また、2区ではもう一度調査区全体の遺構の精査を行なった結果、黒色土・暗褐色土がシミ状に入り込む箇所がいくつか確認され、平面プランを確かめた上で掘削をし、新たに数個の小穴が確認された。これと並行して溝の掘削作業も進行した。

12月9日(月)～12日(木)1区は、平面実測作業を10日までに終了させたが、以前の遺構検出作業の際に2区同様に黒褐色土・暗褐色土を覆土とする不整形の比較的大きな土坑が7箇所認められており、それを掘削した。2区は南側の溝(SD05)について土層断面図を2箇所作成し、取り外しも含めて溝の掘削作業を11日までに完了した。また、10日の午後から竪穴住居跡(SB01)の調査に入った。まず、遺構の平面プランの長軸・短軸に幅30cmほどの直交する土層帯を設定して土層帯を残しながら遺構内の覆土を除去していった。そして、一旦住居の床面まで検出した段階で土層断面図の作成と床面検出状況を撮影した。つづいて土層帯を除去し、床面検出状況の平面図を作成した。さらに、遺構の完掘をした。また、11日の午後から調査区のほぼ中央に確認された風倒木跡を土層断面図の作成をしながら掘削した。

12月16日(月)1区は、再び遺構全景の撮影をし、平面図の補足を行なった。2区は風倒木跡の土層断面図を作成し、完掘した。そして、竪穴住居跡の完掘状態の撮影と風倒木跡の完掘状態の撮影を行ない遺構全景撮影の準備へ入った。

12月17日(火)～19日(木)17日の午前中に遺跡の全景を撮影し、午後から平面実測の準備に入った。18・19の両日で平面実測作業を行なって、予定されていた調査のすべてを終了した。



発掘作業



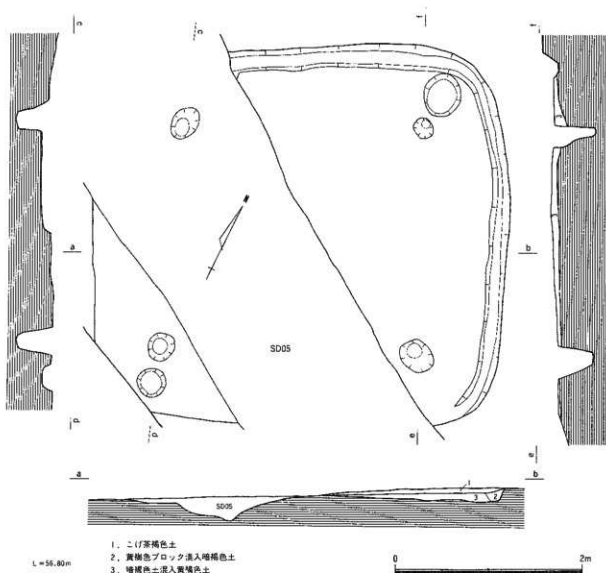
実測作業

第IV章 遺構

吉岡原遺跡で検出された遺構は、竪穴住居跡（SB）1軒、近世以降の溝（SD）5条、小穴（SP）9個とその他の遺構（SX）8個である。以下、竪穴住居跡・溝を中心に各遺構の概要について述べたい。

SB 01

B-9・10区にわたって検出された竪穴住居跡である。主軸が64.5°東に傾いている。平面プランはやや不整形であるが、わずかに東西に長い隅丸方形を呈する。大きさは長軸は4.45m、短軸は4mを測る。遺構の残存状態は悪く、遺構のほぼ中央部を近世以降の溝（SD 03～05）によって削り取られている。また、南端が調査区外に出ている。覆土は比較的しまりのある焦茶系褐色土（1層）で、5～6cm（溝に近づくにつれ1～2cmの薄い堆積になる）の厚さである。覆土中から少量の土器が出土している



第5図 SB 01平面実測図

が、すべて小破片である。住居跡の床面は貼り床（堅くしまった暗褐色土混じりの黄褐色土：Ⅱ層）が施されていた。

住居内からは、小穴が6個検出されており、そのうち4個は位置関係から、この竪穴住居跡にともなう柱穴と考えられる（うち1個は溝中から検出されたため上部は削り取られている）。柱穴は径30～35cm、深さは40cmほどでほぼ同一の大きさ・形態を示す。遺物を出土した柱穴は溝の南側にある1個（SP07）だけであるが、出土土器は弥生土器の小破片である。また、床面には焼土などの広がりも無く炉跡は確認できなかった。あるいは、溝によって削られてしまったのかもしれない。

住居跡の掘り方はあまり明瞭ではないが、中心部が若干盛り上がりしており、壁に向かって緩やかに傾斜していた。

また、床面検出時に壁溝が周囲にめぐっているのが確認された。溝の幅は、20cmほどで深さは14～15cmを測った。壁溝内の覆土は、黄褐色ブロック混じり暗褐色土（Ⅲ層）であった。壁溝は住居跡の北側部分だけで確認されており、その残存状況は良くなかった。西側部分では明瞭に確認されたが、東側の部分では徐々に浅くなり消失していた。壁溝からの遺物は皆無であった。

遺構の時期については、柱穴内の土器は弥生時代後期であるが、後述するように住居跡の平面形から、むしろ弥生時代後期末から古墳時代前期に属するものと考えられる。

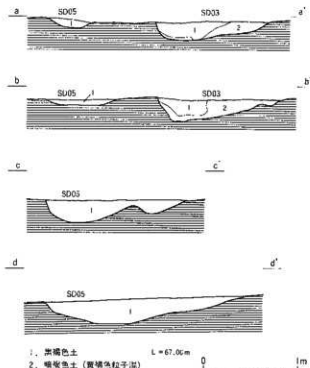
SD02

北側調査区境（B-8～18区）で検出され、第4図で示したようにB-10区で溝の立ち上がり部分が調査区北側にのび、溝はさらに西限はB-18区で、その検出状況から調査区の北側および西側に及んでいることは明らかである。平面形態は、B-10区で溝幅を狭めながら緩やかに北西に曲がり、B-11区からはほぼ直線状に少しづつ北に傾きながら西側につづいている。区境の農道をさきみ1区に至ると調査区境に立ち上がりの一部を見せるのみでB-18区において調査区外に消える。溝の断面は皿状を呈し、全体的に浅く最深部で0.11mである。幅は検出できている部分だけに限定すれば、広いところで1m、狭いところで0.31mである。覆土は黄褐色微粒子混じりの黒褐色土である。遺物はB-10区で弥生土器の小破片が1点出土している他はまったくない。

SD03

第4図で示したように調査区のはほぼ中央を東西に貫いて検出されており、1区の調査区西端（B-23区）で北側に大きく曲折し、調査区外にのびている。また、東端も調査区外に及んでいる。

B-23区では北側調査区境で検出（幅1.4mを測る）され、調査区と平行する形で東へのびている。B-18～21区にかけてやや北寄りに膨らみながら、区境の農道から2



第6図 SD03・05断面図

区全域では少しづつ南側に傾きながら調査区境に至る。溝の幅は西から東に移行するにつれて狭まる。

溝の断面は第6図で示したように北側は緩傾斜で、それに対して南側のそれは急勾配を示す。また、断面形態の変化も東に来るほどにきちんとした北緩南急の形態は崩れがちになるが、それでも一定した断面形態は残されている。覆土は、1区では明確に2分され、上層にはSD02で見られたものと同一の黒褐色土、下層には比較的しまった黄褐色微粒子混じりの暗褐色土である。2区では他の溝(SD05)に切られており覆土は、黒褐色土の単層になる。遺物は、B-20区で弥生土器の小破片が1点出土している。

SD04

2区のB-9~11区にかけて検出された。前述のSD03と平行して調査区を東西に走る。検出できた部分だけではあるが断面形態は皿状を呈し、幅0.95~1m、深さ0.1mほどを測る。本来はSD03と平行して東西にのびていたと推測されるが、SD05によってほとんどを削られ消失している。覆土は、前述の2つの溝と同じ黒褐色土の単層である。遺物は、B-9区で弥生土器の小破片が1点出土しているのみである。

SD05

調査区全域にわたって検出された。B-23区で調査区境から始まり、SD03に平行して多少南に傾きながら東にのび、2区に至る。2区では前述のSD03・04を壊してさらに東にのびている。C-10区で北に向って直角に近い角度で折れ曲がり40cmほどして、再びもとの軌道に戻り東側の調査区外にのびている。B-8~10区にかけて10cmほどの礫が集中していた。

溝の幅・深さについては西側では幅50cm、深さ3~5cmと浅くB-21・22区で消失してしまう。B-20区で次第に幅・深さともに大きくなり、幅1m前後、深さ10cmほどになる。断面形態は皿状を呈する。2区では深さが大きくなり20~25cmになり、断面形態も碗状となる。覆土は、黒褐色土である。出土遺物は、弥生土器の小破片が数点とB-9区の礫群中で17C代の香炉底部片(志戸呂焼?)1点が、B-18区で18C代の陶器の丸碗破片(瀬戸・美濃)数点がそれぞれ出土した。

以上4つの溝はいずれも近世以降の溝であると思われるが、そこには多少の新旧関係が認められる。4つの溝はすべて同一方向に崩って検出されることから、その性格は不明ではあるが、何か似た用途に利用されたであろうことは推測される。

このうちSD02は屈曲の仕方が他の3つとは異なるため少なからず、違いがあるのかもしれない。SD03~SD05については重複する場所があるため時期的に異なる存在であったことは確実である。覆土の違いは捉えることができなかったが、SD03・SD04はSD05によって壊されていると思われる。また、SD03・SD04は、ほぼ同じ間隔をもって検出されることから同時期の存在かと思われる。1区で検出されたSD05は、SD04の幅・深さと断面形態がよく似ており、同一時期に掘削されたと考えられる。

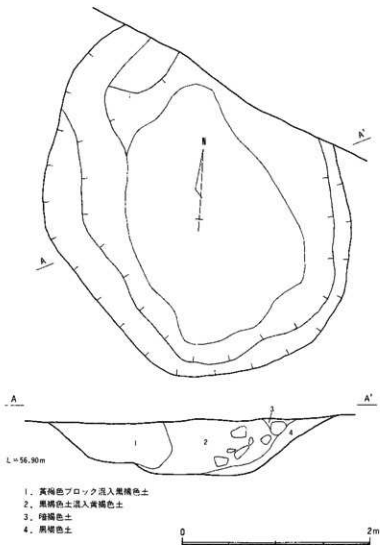
また、SD05はC-10・11区で何かを避けるように面白い曲がり方をする。なぜ、このような曲がり方をしたのかは知る由もないが、SD02もこの地点で微妙にはあるが同じような曲がり方をしており、何か関連があるのかもしれない。また、SD05の曲がり方が、SD03・SD04の2つの溝の1本化に影響したのかもしれない。

SX08

B-11・12区で検出され、一部は北側の調査区外にのびている。平面形態では幅20~30cmほどの黒褐色土が径4mほどの不整形な楕円でドーナツ状に確認された。平面形態あるいは断面の観察から風倒木跡と考えられる。断面の観察で黒褐色土が南西部に多く、北東部に少ないことから木は北方向に倒れたものと推察される。また、黒褐色土から当遺跡出土の半数近くを占める土器が出土しており、すべて弥生土器である。この遺構の時期は、覆土から弥生時代後期の土器が出ていることから、この時期以降のものと考えられる。

その他の遺構

小穴9個と不整形の掘り込み7個が検出されている。遺物は小穴(SP06)で弥生土器の小破片が1片が出土しているのみである。覆土は前述した溝の覆土同様の①黒褐色土と②暗褐色土に分けられる。不整形の掘り込み7個は、すべて1区で検出されており、覆土は西側の3個が①であるのに対して東側の4個は②である。また、小穴は1区の3個、2区の6個で径は20~30cmのものと30~40cmのものに分けられ、ほとんどが前者である。覆土は、SP06を含め2個が②で他は①であった。時期は不明である。



第7図 SX08 平面実測図

第V章 遺物

今回の調査で出土した遺物は、ほとんどが土器である。すべてが小破片であり、その量もきわめて少ない。このうち主なものを第8図に石器1点を第9図に掲載した。土器の大半がSX08からの出土で、SB01出土の土器は数も少なく、すべて小破片のため遺構の時期を決定することは難しい。土器は大半が菊川式土器に属するものと考えられるが、明瞭でない部分もあり、弥生後期から古式土師器にかけてのものが含まれていると考えている。以下番号順に説明したい。

掲載した遺物は、1・8がSB01、17・18は包含層である。他はSX08出土である。

I 壺

1 口縁部片で、外面には全体に斜位のハケ目、口唇部と頸部にナデが施されている。内面はヘラ状工具によるミガキが施されている。

2 折り返し口縁をもつ口縁部片で、外面は横位のハケ目が見られ、調整後にナデ消している。内面にはハケ目が見られる。

3 口縁部片。外面には粗い斜位のハケ目が施され、内面の上半部にはナデが施され、一部に扇形文が見られる。下半部には縦位と斜位のハケ目が見られている。

接合はできないが、3・6・9・11は同一個体と思われる。

5 口縁部から頸部にかけての一部である。外面はハケ調整後ナデ消している。内面はナデ調整が施され、口縁部にはやはり扇形文が認められる。

4・7 肩部片である。4の外面には明瞭な櫛横線文が、7の外面には上部にやや不明瞭な横線文が見られ、両方とも直下には羽状刺突文(擬似縄文)が施されている。横線文は1単位4本である。4の羽状刺突文直下には、ハケ調整後のナデ消しが認められる。内面はともにナデが施されている。

9 肩部から胴部上半にかけての破片で、肩部に櫛横線文が、直下には羽状刺突文が施されている。胴部上半にはハケ目が見られる。内面はナデが施されている。

6 胴部片である。外面は下半部に明瞭な稜線が見られ、稜線より上部には斜位のハケ目が施され、下部にはミガキが認められる。内面にはナデが確認される。

11 底部で、ほとんどが欠損しているが外面の底部裏面に木葉痕・初痕が観察できる。

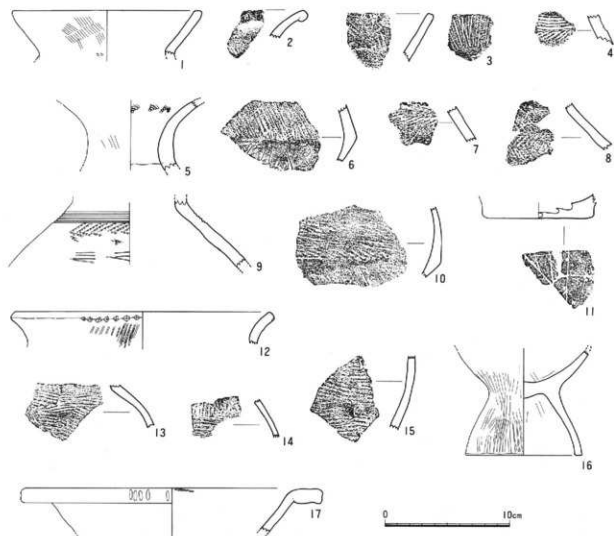
8 頸部片である。外面上半部は縦位のハケ目の後ナデが、下半部は摩滅のため不鮮明ではあるが、羽状刺突文(擬似縄文)が施されている。内面にはナデが施されている。

10 胴部片である。外面は6同様で下半部に稜が見られる。稜の上部は6に比べるとやや膨らみ気味で、ハケ調整が施されており、下半部は摩滅のため不明瞭であるが、細かい横位のハケ目が認められる。また、胴下半部から上方に幅2cmほどの灰色の帯状斑が認められる。内面は細かいハケ目が見られ、その後ナデを施している。

II 甕

12 口縁部片。口唇部にやや不明瞭な平坦面を設け、刻み目を施してあり、口縁部から頸部にかけては縦位のハケ目が施されている。内面はハケ調整後ナデが施されている。

13・14 肩部片。13の外面には斜位・横位のハケ目が認められ、色調は煤の付着により黒ずんでいる。内面はナデが施されている。14の外面は上部に縦位のハケ調整が、下部に横位のハケ調整が施されている。内面には上端面に横位のハケ目が認められ、他はナデが施されている。ハケ調整後に縦位のミガキが認められる部分がある。



第8図 出土石器実測図

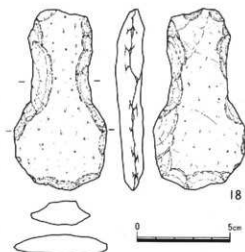
15 胴部片で、外面は横位のハケ調整が、内面にはナデが施されている。

16 台付臺の胴部から脚部にかけての破片。外面は胴部から脚部にかけての接合部に縦位のハケ目が施され、脚部には斜位のハケ目の後に縦位のハケ目が施されている。内面はハケ調整後にナデ消しが施されている。

III その他

17は折り返し口縁をもつ高坏の口縁部片である。外面口縁部には、薄い棒状沈線が施されている。内面は口唇部平坦面の一部に刺突が観察されるが、他は摩滅が著しい。

18は分銅型打製石斧で、長さ9.6cm、巾5cm、基部の厚さ1.3cm、刃部の厚さ1cmを測る。石材は砂岩と思われる。断面は基部が円盤形、刃部は横位の木葉形を呈する。時期は縄文時代のものと思われる。



第9図 出土石器実測図

第Ⅵ章 まとめ

今回の発掘調査によって弥生時代後期から古墳時代前期にかけての竪穴住居跡1軒、時期不明の小穴数個、風倒木跡を含む不整形の掘込み8個、近世以降の溝5条の遺構が確認された。遺物はごく少量ではあるが、弥生時代後期の菊川式土器、近世陶器数片と縄文時代と思われる打製石斧が出土した。出土土器のうち、ほとんどが風倒木跡からの出土であり、竪穴住居跡出土のものは少量で、いずれも小破片であるために後述するが遺構の時期決定のための積極的な要素とはなり得なかった。他の遺物は溝中もしくは包含層からの出土であった。以上の調査成果から気づいた点を記し本報告書のまとめとしたい。

1 竪穴住居跡について 昭和61年度に市教委によって行なわれた別地点での調査の結果、弥生時代後期(菊川式)の住居と古墳時代前期(古式土師器)の竪穴住居跡が検出されている。それらの時期区分の決定は出土した完形かそれに準ずる土器によっている。その際に住居跡の平面形態による時期差が指摘されており、前者は楕円形、後者は隅丸方形を呈していた。

今回の調査で確認された竪穴住居跡の平面形態は先に述べたように隅丸方形に近く、平面形からは古墳時代に属する可能性が高い。ちなみに隣接の市教委発掘地点で検出された竪穴住居跡3軒の平面形態は楕円形を呈し、調査者は出土土器から弥生時代後期に比定している。

弥生時代後期の菊川式土器と古式土師器の間は明確でない場合が多く、個体では分離が不可能な例が多い。したがって、今回検出された竪穴住居跡の時期を平面形態から古墳時代前期の可能性が高いとしておこうと思う。こうした傾向は、この地域で比較的広く認められている。

また、住居跡から炉跡が検出できなかったことについては、隣接の3軒の住居跡ではいずれも住居跡の主軸(長軸)に対して、中央やや北寄りの位置に確認されている(このうち1軒は他の2軒と主軸の方向がおよそ90°東にずれており、住居跡も調査区外にかかり炉跡位置も推定。第3図参照)。昭和61年度に検出された住居跡の炉の位置も同様の傾向を示す。したがって、今回検出の住居跡にも同様の位置に炉跡が設けられていたとすれば、検出されるはずであるが発見できなかった。炉の設置されなかった住居である可能性はあるが、炉跡の位置に差があり、後世の溝に削られてしまったことも考えられる。今後の類例をまて検討したい。

2 調査地点の遺跡に占める位置 今回の調査は、東西約80m、南北約6mの範囲を対象として実施した。したがって、遺跡の広がりについて南北は明確にならないが、東西については、ほぼその広がりを確認できた。すでに市教委の調査によって隣接する東側で弥生時代後期から古墳時代前期にかけての住居跡群が確認されており、その遺構群の西側への広がりがどこまであるのか注目されたが、今回の調査の結果、住居跡の検出された地点は台地の東端から西へおよそ250mほどの位置であり、それから西側には住居跡はまったく検出されなかった。したがって、以上の状況から弥生時代後期から古墳時代前期にかけての集落跡は東西250mほどであり、その中で台地の端から西側に広がっていたものと思われる。これは周辺の微地形の観察でも、調査区の西端から西側に浅い谷頭が入り、低くなっていることも一致している。

3 溝について 調査区から平行する3条の溝が検出されている。幅、深さともよく似ており、江戸時代の土器を出土している。この地域を通過していたであろう県道掛川山梨線の前身ともいべき道の

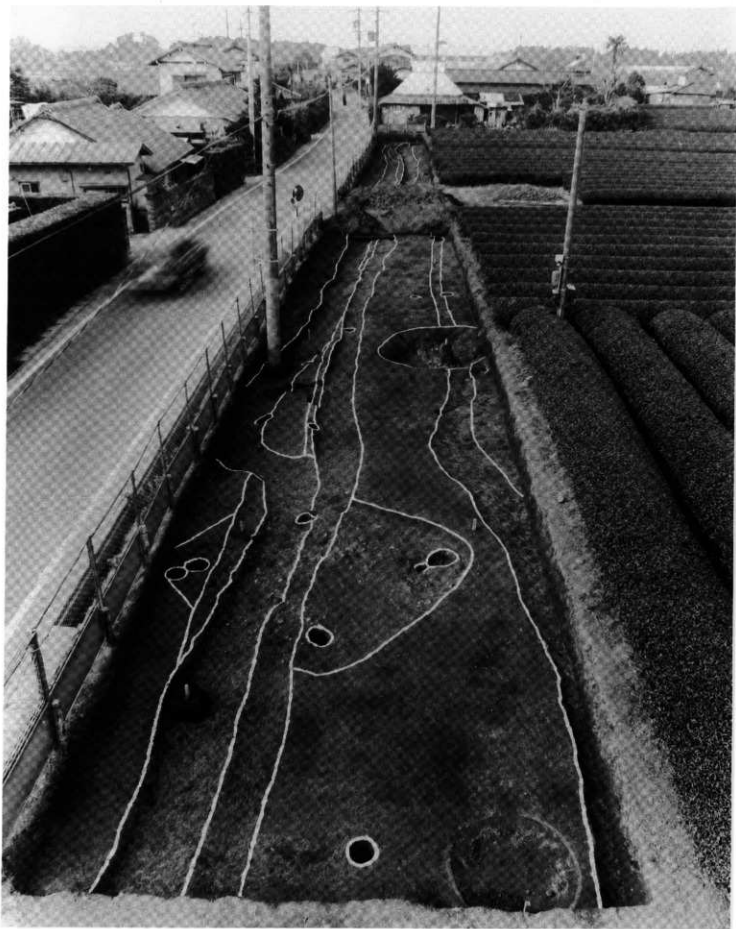
側溝と考えられる。溝には強く湾曲した部分があり、電柱を避けてのものと思われる。とすれば、この溝の一部は近世以後のものが含まれていると考えたい。

参 考 文 献

- 掛川市教育委員会 『中原遺跡 発掘調査概報』 1982
掛川市教育委員会 『掛川市遺跡地名表』 1982
掛川市教育委員会 『掛川市遺跡地図』 1983
掛川市教育委員会 『掛川市遺跡分布調査報告Ⅰ』 1984
掛川市教育委員会 『中原遺跡 発掘調査報告書』 1984
掛川市教育委員会 『高田金箔原遺跡 発掘調査概要』 1984
掛川市教育委員会 『女高遺跡 発掘調査概報』 1985
掛川市教育委員会 『梅橋北遺跡 発掘調査報告書』 1985
掛川市教育委員会 『高田上ノ段遺跡 発掘調査報告書』 1986
掛川市教育委員会 『瀬戸山Ⅰ-a遺跡 発掘調査概報』 1987
掛川市教育委員会 『瀬戸山Ⅰ-b遺跡 発掘調査報告書』 1987
掛川市教育委員会 『吉岡原遺跡 発掘調査概報』 1987
掛川市教育委員会 『高田遺跡 発掘調査概報』 1988
掛川市教育委員会 『中原遺跡 発掘調査報告書』 1988
静岡県埋蔵文化財調査研究所 『領家遺跡 昭和62年度袋井バイパス（掛川地区）埋蔵文化財調査報告書』 1988
静岡県埋蔵文化財調査研究所 『梅橋北遺跡 昭和62年度二級河川太田川中小河川事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』 1988
掛川市教育委員会 『藤六3号墳・高田遺跡 発掘調査報告書』 1990
掛川市教育委員会 『女高遺跡・行人塚古墳 発掘調査報告書』 1990
鈴木道之助 『図録 石器の基礎知識Ⅲ 縄文』 柏書房 1981

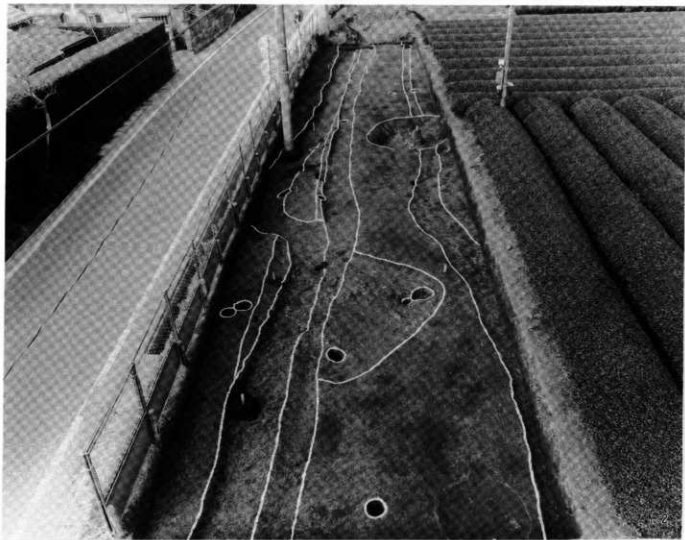
圖 版





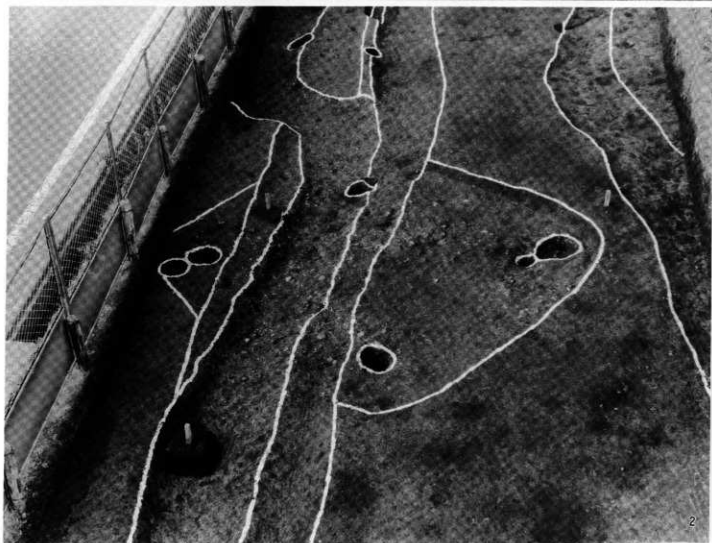
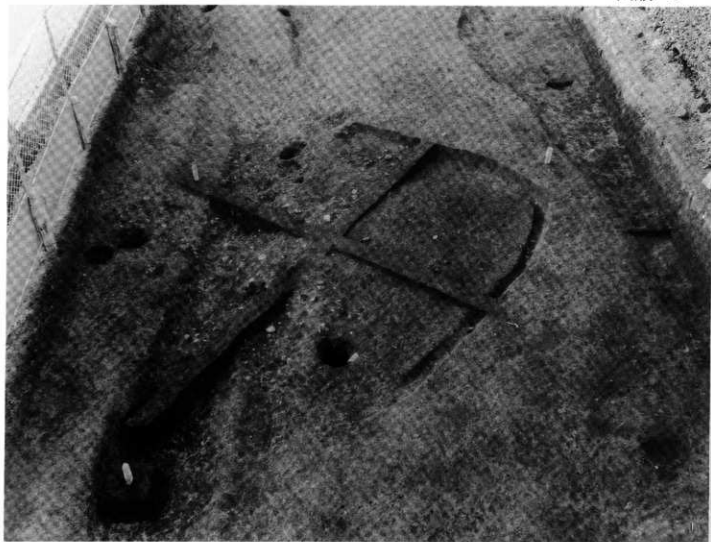
図版3 遺構検出状況

- 1 1区遺構全景（東から）
- 2 2区遺構全景（東から）

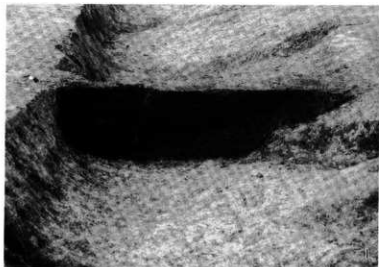


図版 4 S B 0 1

- 1 床面検出状況（東から）
- 2 完掘状況（東から）



- 图版 5
- 1 SD03 土层断面
 - 2 SD03·05 检出状况 (I 区)
 - 3 SX08 完掘状况

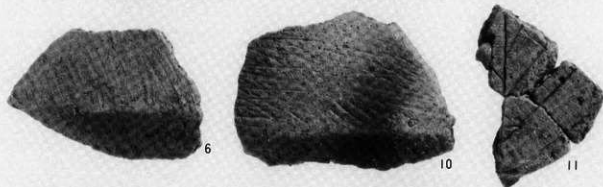
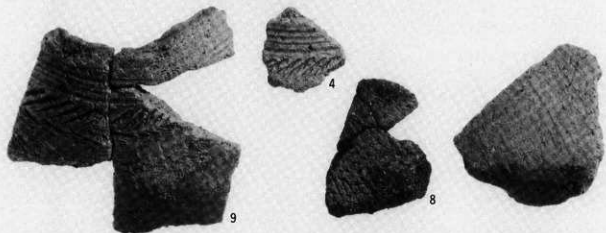


図版 6 出土遺物 I

1・8 SB01出土

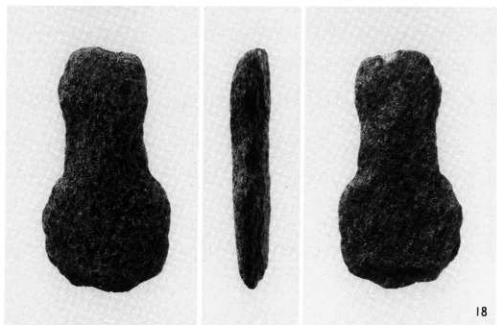
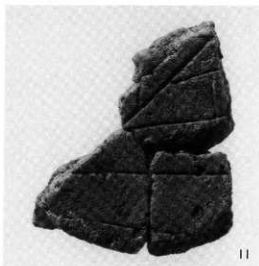
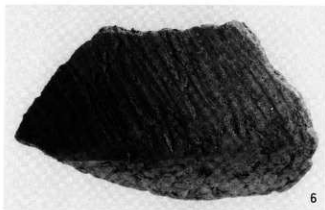
2～7 9～16 SX08出土

17・18 包含層出土



図版 7 出土遺物 2

- 16 S X 0 8 出土の台付甕脚部
- 5 壺口縁部内部の扇形文
- 9 壺肩部の櫛指文
- 6 壺胴部の調整痕
- 11 壺底部外面木葉痕と左上に靱痕
- 18 打製石斧の展開



吉岡原遺跡

平成3年度島根県川山関係道路改築に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告

平成4年3月20日

編集発行 財団法人
静岡県埋蔵文化財調査研究所

印刷 株式会社 三 創
静岡市中村町166番地の1
TEL (054) 282-4031